# 今、ヨーロッパを考える
## あたらしくなったヨーロッパ展示

ヨーロッパは、南北、東西と、多様な地理的条件を背景に、各地でさまざまな文化をはぐくんできただけでなく、大航海時代以降は、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、多くの技術や知識を世界各地に移植してきた。そして現代、今度は世界中から移民が流れ込み、移民たちの文化もヨーロッパ社会の一部になり始めている。

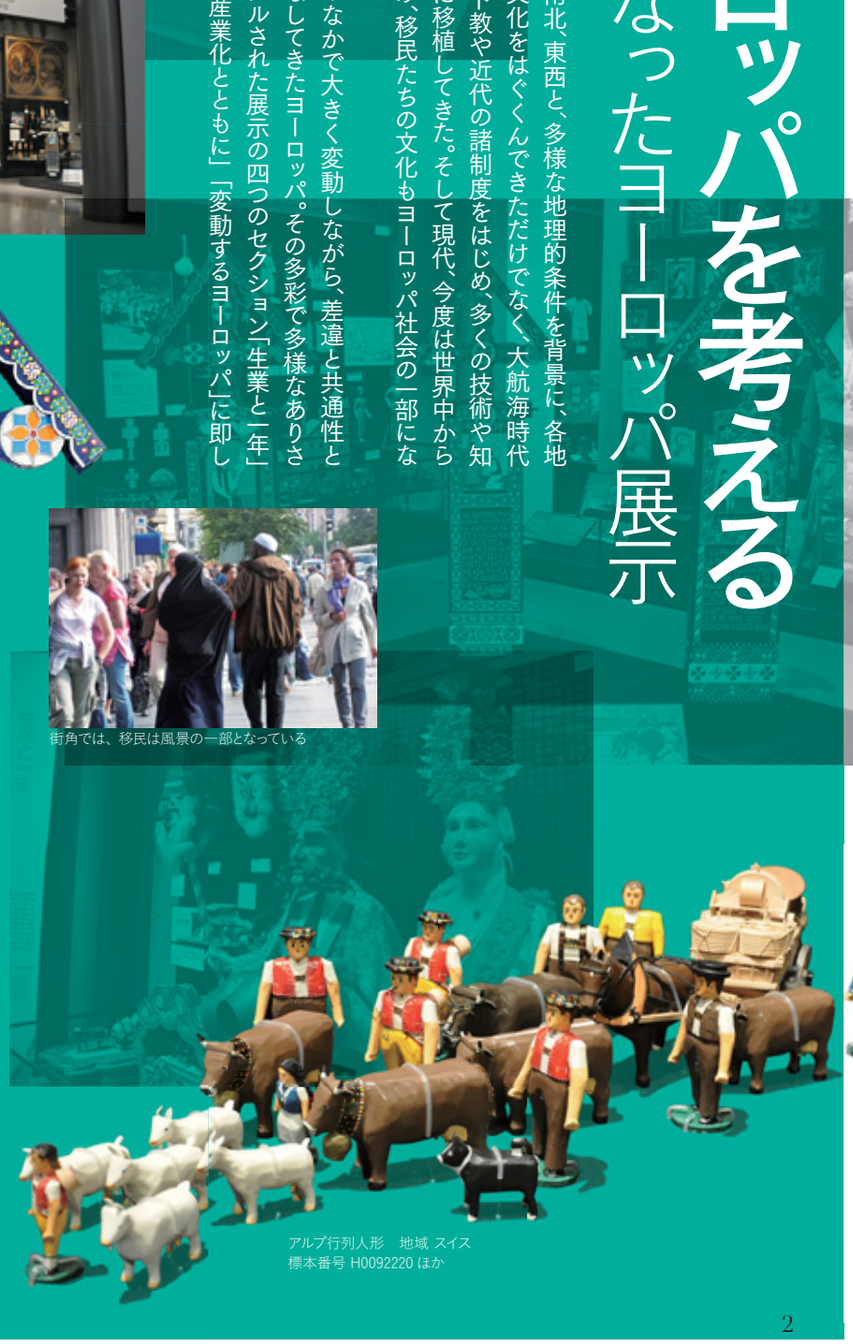
こうした歴史のなかで大きく変動しながら、差違と共通性とが複雑に綾をなしてきたヨーロッパ。その多彩で多様なありさまを、リニューアルされた展示の四つのセクション「生業と一年」「宗教・信仰」「産業化とともに」「変動するヨーロッパ」に即してみてみよう。

煙突付きアイロン　地域 ポルトガル
標本番号 H0151I186

チーズ用型　地域 ルーマニア
標本番号 H021I887

陽気な墓
地域 マラムレシュ、ルーマニア
標本番号 H02II880

街角では、移民は風景の一部となっている



アルプ行列人形　地域 スイス
標本番号 H0092220 ほか



# 生活にきざまれる農業のリズム

宇田川妙子（うだがわたえこ）　民博 民族社会研究部

ヨーロッパの生業は、麦作と牧畜の組み合わせを中心とするものである。たしかに現在ヨーロッパは、農業と結びつけて語られることは多くないし、自然に対する意識も、日本人に比べると敏感でないとよくいわれる。しかし、農業は今でも彼らの重要な産業のひとつであり、彼らの生活も、そのリズムをとおして自然と深くかかわっている。

### 六月の聖体祭

たとえば五月後半から六月。この時期イタリアでは、聖体祭とよばれるカトリック教の儀礼が各地でおこなわれる。聖体とは、ミサの際に食される聖別されたパンのことで、キリストの身体が実体化したものとされている。聖体祭は、その聖体にちなんだ祭りだが、同時に、花を街路や道路に飾る祭りとしても知られている。

なかでも有名なのは、ローマ近くのジェンツァーノという町の花祭り（インフィオラータ）だ。町の中心の大通りに、バラをはじめとするさまざまな花びらで、絵や模様が道いっぱいに描かれる。その花のカーペットの上を、聖体を掲げた宗教行列がとおる姿は圧巻である。

ジェンツァーノの花祭り（1987 年）。
花祭りは神戸でも 1997 年からおこなわれるようになった

### 農業のサイクル

イタリアの農業のサイクルは、日本の米作とは違って、晩秋のころを起点とする。麦の種まきは、多くは秋から冬にかけての時期におこなわれるからである。しかし冬になると、生活の場は次第に屋内へと移り、長く暗い冬を経てようやく春が訪れる復活祭のころ（三月後半から四月）、農作業が再開する。そして夏になれば、すぐに牧草用の草刈りや麦の収穫が始まって多忙となり、ブドウなどの収穫の秋へと続いていく。

ゆえに聖体祭がおこなわれる五月から六月にかけては、その農繁期の前、まだ余裕のある時期でもある。木々や花々も盛りとなり、都会に住む人びともその自然を楽しむために、郊外にピクニックに出かける習慣はむかしから続いている。花をモチーフとする聖体祭が、こうした生業と季節のサイクルのなかで春を謳歌（おうか）する祭りとして位置づけられていることは明らかだろう。

9 月はブドウの収穫の季節。家族総出で収穫し、自家製のワインを仕込む人は今でも多い

### 展示の構成

リニューアルした展示では、「生業と一年」のセクションで、以上のような農業のサイクルと人びとの生活のつながりを紹介している。

まずは、翌年の農作業のための準備と冬用の保存食作りなどにいそしむ「秋から冬へ」のコーナーでは、冬季の屋内での家具作りなどの仕事

クリスマス人形「キリスト降誕」
地域 フランス
標本番号 H0216947

木靴　地域 フランス
標本番号 H0003426

についても展示した。「冬から春へ」は、この時期、クリスマス、新年、カーニバル、復活祭など、冬至や春分という時間の節目に合わせた祝祭が数多くおこなわれていることに注目した。

そして「夏から秋へ」では、夏至以降、牧草刈り、麦やブドウなどの収穫、ワイン作りなどが続き、秋の収穫祭とともに農業のサイクルが終わる様子を、その作業にかかわる農具を中心に展示している。一方、豚、牛、羊などの牧畜は一年をとおしての仕事であり、特にその乳の利用については「酪農」のコーナーで示した。

### 生き続ける季節のリズム

ヨーロッパでも今や、農業に直接従事する者は少なくなっている。しかし人びとは、旬の食べ物を市場で購入したり親戚から分けてもらったり、また、すでに述べたような季節ごとにおこなわれる祝祭をとおして、そのリズムを体感している。近年では、観光化やエコロジー・ブームも、その傾向を後押ししているだろう。

農業も自然も、さまざまな社会変化を経てもなお、身近な生活のなかで実感として生き続けているヨーロッパ。それもヨーロッパの重要な顔のひとつであることを忘れてはならない。



# 教会制度と人びとの慣習
## ――東ヨーロッパのキリスト教を中心にして

新免（しんめん）光比呂（みつひろ）　民博 民族文化研究部

キリスト教には、教会制度的な面と人びとの慣習的な面がある。「宗教・信仰」セクションでは、両方を示そうとしている。

キリスト教の教えの中心は、アダムとイブによって死が人類にもたらされ、イエスの受難によって罪が贖（あがな）われた人類は、イエスの復活によって自らの復活の希望をもつことができるというところにある。そのため、死をどう考えるかは教会の重要な問題である。

### 陽気な墓

ルーマニアのサプンツァ村にある「陽気な墓」の墓標は、樫の木にユーモラスな絵と文章で、なくなった村人の一生を表現したものだ。村の職人スタン・パトラシュが数十年前にはじめ、現在は二代目の職人が継承している。民衆による死の受け止め方の一例だ。

教会とは、キリスト者の共同体である神の家である。また教会は信者が実際に集う場所であると同時に、地上の神の国を象徴する。教会堂の建築には、ドームを構造的、象徴的な中心とするビザンチン様式、素朴なロマネスク様式、森林をイメージする高い塔を強調するゴシック様式、たまねぎ帽子で有名なロシア正教会のよ

ガラスイコン「最後の晩餐」 地域 ルーマニア
標本番号 H02II585

春祭りと民族衣装。春の喜びを華やかな衣装と踊りで表現する若い男女

陽気な墓。墓地であることを忘れさせる明るく鮮やかな墓標

うなネオ・ビザンチン様式などがある。

### 日常と非日常

日常の慣習的な宗教行為も大切だ。日曜日や、イースター（復活祭）、クリスマス、聖母マリアの特別な日ともなれば、教会の行事に村人は一番の晴れ着を着て参加する。村はずれにはトロイツァなどとよばれる道標が立てられ、村を守る。

巡礼は、人びとが日常から離れてキリスト教の信仰を表現し、体験することを示す。四世紀にキリスト教が公認されると、パレスチナやエルサレムへ参拝する信者が旅行するようになり、また各地の殉教者記念堂も対象となった。サンチャゴ・デ・コンポステラなどが特に有名だ。聖地への旅の過程で、人びとは神とのつながりを再認識して信仰を強化する。

### イコン崇敬

東方正教会を他のキリスト教宗派から際立たせるのは、「礼拝用板絵」としての「イコン」への崇敬である。偶像崇拝の禁止は、初期キリスト教においても重要視されていたが、聖者の聖遺体・遺物を祭壇の下におさめる習慣が影響して四世紀中ごろから変化が生じ、イコン崇敬が生まれた。ただし、立像のイエス像やマリア像は決して用いない。

偶像崇拝と微妙な関係にあるイコン崇敬は、感覚的なものは超感覚的なものを認識するために必要であり、イコンは単なるモノではなく、これをとおして神そのものを崇拝する手段であるという考え方に基づいている。キリスト自身、神的なものが人間の肉体となってこの世にあらわれたものであり、目に見えない神がイエスという人の形をとることによって自らを証したからである。それゆえ、イコンは教会の教えを生活のなかで実際に体験する場を構成する。

民衆が素朴なレベルで理解した信仰を、単純な構図で表現したのが「ガラス・イコン」である。修道士に限らず農民などの世俗的人間も製作した。さらに巡礼をおこなった信者が記念に持ち帰る記念用として販売されたために、巡礼地を中心にして広まった。

大主教祭服　地域 ギリシャ
標本番号 H0230387 ほか

# 産業化とともに
## ——一九世紀末〜二〇世紀初頭のヨーロッパ

森明子（もりあきこ）　民博 民族文化研究部

今日のわたしたちの身の回りには、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてヨーロッパで形をなしたものが少なくない。たとえば社会保険制度は、産業化によって変化した人びとの生活にあわせて、この時代に整えられた。しかしこうした制度のいくつかが、現代破綻をきたすようになってきた。当時の人びとの生活とはそれ以前の生活とどのように変わり、現代の生活はそこからさらに、どのように変わってきているのだろうか。「産業化とともに」セクションでは、近代という時代に生きた人びとの生活を、一九〇〇年ころに焦点をあてて示した。

「産業化とともに」セクション、「市民階級家族の生活」コーナー

**工場制機械工業が引き起こしたもの**

この時代、それまで職人が手作りしていたものが、工場で大量に機械生産されるようになった。このような生産体制のもとでは、誰がどのような作品をつくるかより、短時間にどれだけ多くの製品を生産できるかが問題とされた。工場生産は分業を組織化することによって成り立ち、労働は働いた時間で数えられるものになった。労働とそれ以外の時間が明確に区分されるようになったことは、人びとの生活にレジャーや休暇という新しい領域を生み出すことになった。

あくことなく労働力を求める産業は、農村から都市への人口移動を招き、肥大した都市では貧困や衛生の問題が起こるようになった。こうした問題を解決するために社会保険という考えは生まれたのである。都市で生活する労働者たちは、財産や専門的な職業をもつ市民階級（中産階級）とは別の、労働者階級独自のライフスタイルに根ざした文化を生み出した。一九世紀から二〇世紀にかけてのヨーロッパの都市社会は、市民階級と労働者階級がともにつくったものだった。この労働者階級と市民階級の境界が曖昧になり、かわって移民があらわれている。

**既製服産業の発達と家内労働**

展示場の一角では、大都市の家内労働として既成服産業をとりあげた。衣服は長い歴史を通じて仕立職人に注文してつくらせるか自分でつくるものだったが、産業化の進んだ一九世紀後半のベルリンで既製服産業が起こり、まもなく輸出産業にまで発展した。ベルリンの既製服産業は、当時の大都市で、企業家と職人親方と労働者家族が階層的な分業体制をつくりあげていたことを示している。

企業家としての既成服業者は、百貨店や目抜き通りに店舗をかまえ、海外の顧客の注文にも応じていたが、商品生産は下請けに出していた。生産を請け負った職人親方は、生地の裁断と商品の仕上げをおこない、大部分の縫製は孫請けに出していた。孫受けを担ったのは女性たちの家内労働で、裁断された各パーツをミシン縫製した。ミシンが都市の家庭に普及し、女性の労働力と結びついたことによって、この産業は成立していたのである。

別の一角には、農村の家内労働として亜麻（あま）生産をとりあげた。亜麻は栽培から衣類に仕立てるまでの全工程を農家でおこなっていたが、産業化とともに木綿製品が普及するにつれて農村から姿を消していった。現代では、ゆきすぎた産業化を批判的にとらえる観点から、自然繊維としての亜麻を見直す動きも起こっている。

ベルリンの既製服産業の一部をなす仕立て職人のアトリエ。1900 年ころ
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen



1900 年ころドイツで使用されたシンガー社製の足踏みミシン
ベルリン国立博物館群、ヨーロッパ諸文化博物館寄贈

ドイツ AEG 社の大工場。分業体制のもと労働者は同じ姿勢で同じ作業をおこなう。シルクハットをかぶった労働監督官の姿が見える。1900 年撮影、ベルリン
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen

労働時間標識（複製）。「1週 54 時間、休憩時間と準備時間を除く」
ブラウエンフォークトラント博物館所蔵

# 多「民族」は共存できるのか
## ――ヨーロッパのこころみ

庄司博史（しょうじひろし）　民博 民族社会研究部

一九世紀以来、民族と言語を一とする均質な国民国家のモデルを作りあげてきたヨーロッパに、今大きな動きがみられる。「変動するヨーロッパ」セクションでは、ヨーロッパの統合、そして移民の増加が、国民国家にもたらした衝撃と影響から、ヨーロッパの今日をとらえてみた。「ヨーロッパの統合」コーナーでは拡大し続けるEUの動きを追ったが、ここでは、移民の増加とその影響にしぼることにする。

**増加する移民**

特に西ヨーロッパの都市にみられる変貌は著しい。定住する外国人＝移民が完全に風景の一部となっているのだ。労働者、通学の生徒たち、交通機関などいたるところ一見して外国人とわかる人びとが混じる。イギリスやスウェーデンでは外国で生まれた人びとが人口の二割を占めるという国はザラで、地域、職種によっては移民出身者が多数を占める。四〇年あまり前、はじめて訪れた北欧で何度か経験した、「黒い髪なんてはじめて、ちょっとさわらせて」などという体験は今日では想像もできない。

アジアの食文化とともに各地のラーメンが普及しつつある

「変動するヨーロッパ」セクション、「移民増加と統合政策」コーナー

**移民増加の背景**

移民増加の原因は、じつはヨーロッパ自身にある。移民の多くは労働移民と難民、さらに彼らの呼び寄せ家族が占める。それらはさかのぼれば、ヨーロッパによるアジアやアフリカの植民地支配と南欧や東欧、アフリカ・マグレブ地域からの労働力補填（ほてん）に発している。かつて移民は国家間の社会的、経済的なプル・プッシュ要因から説明されてきたが、今やもっぱら既存のなじんだ経路を使い流入する人びとはとどまらない。

ともあれ、今日、ヨーロッパの多くの国は、移民の存在抜きではありえない。労働力、購買力、経済や文化の活性化に移民は大きく貢献しており、減少する人口を移民の増加が支えているという面ももはや公然の事実だ。そして映像モニターをとおして移民が自らのライフストーリーを語るように、ヨーロッパを永住の地として生活する移民も多い。

**ヨーロッパのとまどいと次世代への望み**

展示場では、多言語による案内やパンフレットで紹介したが、そのような移民の社会への統合をうながすため、各国は移民への適応教育、公用語教育をおこなう。一方で、移民の文化や言語の存続を認め、保障しようとする動きも広まりつつある。国民国家の基本理念を民族的言語的均一主義から多文化主義に譲るところもあらわれている。

とはいえ、住民がすべて移民を歓迎しているわけではない。一部の人びとのあいだでは、仕事が奪われる、治安が乱れる、異教徒が増える、汚くなったという不平はおさまらない。いきおい移民の方もより気楽なコミュニティや集住地に閉じこもる。排除の結果、多数派との生活格差はなくならず、移民は社会的に下層化され、集住地はゲット化しがちである。ときおり双方のはけ口のない不満や屈折した憎悪が暴動やテロにつながるや、そらみたことかと移民排斥派の声が高まるのはヨーロッパも同じだ。

事態はしかし、それほど悲観的、絶望的なのだろうか。そうは思わない。少なくとも、生まれたときからともに教育をうけ、育ってきた移民と多数派の次世代のまじわりを各地でみるにつけ、偏見や差別のない未来は可能ではないかと希望をもちはじめている。馬鹿なおとなたちの干渉さえなければ。

民族・国籍のかべを超えるのは子どもが先。
ソマリア、アフガニスタン出身の子どもたち

コラム

# パンからみえる多様性と共通性

宇田川妙子（うだがわたえこ）　民博 民族社会研究部

「生業と一年」セクションのパンのコーナー

パンは、麦作を生業の基本としてきたヨーロッパでは、もっとも基本的な食べ物のひとつである。今回のリニューアルでは、その重要性を示すために、導入部で各地のパン（複製）を展示した。

もちろん、ひと言でパンといってもさまざまである。まず、主たる食材の麦についてみてみると、南ヨーロッパでは小麦が主だが、寒冷地に行くにつれライ麦栽培が増えるため、北に行くほど黒い色をしたライ麦パンが多くなる。展示では、イタリアやフランスのパンに対して、フィンランドやドイツのパンという対比でみてもらうとわかりやすいだろう。ほかにも、今回の展示では出せなかったが、大麦やエン麦を材料にするパンや、ジャガイモやトウモロコシの粉などを入れるパンもある。

食され方も、日常的な主食としてばかりではない。トッピングなどをして間食的に食されるものもある。そして祝祭などの際には、さまざまな装飾を施したパンがつくられる。この展示では、ブルガリアの復活祭用と結婚式用のパンを紹介した。

そもそもヨーロッパのパンには宗教的な意味合いも大きい。キリスト教では、パンは、最後の晩餐（ばんさん）にあるように、キリストの身体の象徴でもあるからだ。クリスマスや復活祭などでは各地で特別なパンがつくられ、教会に奉納されたり、家族や仲間たちと分けて食べられたりしている。

かつてパンは、それぞれの家で焼かれていたが、最近ではたいていパン屋で購入され、工場で大量生産されるものも少なくない。しかし、むかしながらの手法で焼かれるパンは今でも人気だし、それぞれの地域特有の味や形のパンは、その土地の自慢でもある。

この展示では、イタリア、ブルガリア、フランス、ドイツ、フィンランドの合計一三個のパンをとりあげたにすぎないが、その限られたなかでも、いろいろな形や色をしたパンをみることができるだろう。その多様さをとおして、パンがヨーロッパの人びとの生活のさまざまな側面に強く結びついていることを理解していただけたら幸いである。